

随 想

## アムステルダム物語

倉 田 稔

1971年、私は初めての留学で、アムステルダムへ行った。オランダの首都(Hoofdstad)はアムステルダムだと言ったら、日本人に馬鹿にされる。普通はハーグだと教わるからである。しかしオランダ的に言うと、女王陛下がアムステルダムにいるのだから、首都はハーグではなく、アムステルダムである。

アムステルダムは、16c.から17c.にかけて、原型が作られた。アムステルダムは、歴史社会的には違うが、ある意味では小樽に似ている。どちらも古い商業都市で、運河があり、鰯がとれた。アムステルダムは、「運河の町」、ある時は「北のヴェニス」と言われる。しかし、アムステルダムの本を見ると、「ヴェニスは南のアムステルダム」と書いてあった。

アムステルダムには、レンブラント・ハウイスの他、当時の市民の家をそのまま保存して、展示館になっているところがある。といっても実はアムステルダム自体が、当時のオランダそのままといってもよい。というのは、ヨーロッパの諸都市もそうだが、建物が長持ちする。アムステルダム市内の煉瓦たての家もきわめて古く、当時からそのままの家というのが少ない。1500年代に建築されたと表示された建物が散見される。

その上、ナチズム占領の時代に、ロッテルダムは抵抗したのでドイツの爆撃で破壊されたが、アムステルダムは恭順したので破壊されなかったのである。そのためアムステルダムは中世的あるいは近世初期の姿を伝えている。

私はアムステルダム中央駅に降りた。心なしか東京駅に似ている。それもそのはず、東京駅はアムステルダム駅を真似たのである。日本で予約していたアムステルダムの最初のホテルは、市の中心地ダム・プレーン(ダム広場)のそばにあった。それも安ホテルである。1泊しか予約していなかったので、1日で下宿を決めなければならない。だから翌日、下宿協会へ行った。私の月給が当時5万円なので、ホテル生活はできず、下宿を見つけないと、私は早めに帰国せざるをえなかった。下宿協会に下宿経営者が登録されている。そこで、下宿斡旋カードを2枚買った。1枚5ギルダーである(当時、1ギルダーは百円である)。カードには下宿のあて先が書いてある。アムステルダムも東京ほどではないが、住宅難で、下宿探しもむずかしい。

私買ったカードの1枚目は、アムステルダムの中心の下宿で、2食付き、おかみさんは英語を少し話すだけという。2枚目は、3食付で、そのマダムは英語とドイツ語を話すという。私は、初めに1枚目の近い方の下宿から行くことにした。少し安いということもあった。2食付きなので3食付きより安いのも当然である。

初めの家を探しあてると、そこは中年婦人の経営であった。東洋人や黒人の下宿人がかなりいた。おかみさんは、「やあ、あんたは不運だ。今うちは満杯だよ」と言うのだ。満杯なら、なぜ下宿協会はカードを売るのか、ズルい。彼女は、「若い人、そうがっかりしなさんな」と、私の頬を豊かな手でやさしくたたいた。しかしそう言われても、がっかりは簡単には直らない。

仕方ないので、第2の下宿に行くことにした。かつて半年アムステルダムに留学していた私の

先生が、「アムステルダムは大きくなく、都心は歩いて行けます」と言った言葉を信じて、都電に乗らずに出かけた。これはとんでもないことだった。どんな行程だったか、述べよう。駅前から、ダムラク大通りを歩く。ここは観光土産店などがある最もにぎわう所である。そしてダム・プレーン（広場）につく。夏になるとヒッピーや若い旅行者がここにある終戦記念碑のまわりにたむろするので、人は、フルール・ド・アムステルダム（アムステルダムの花）と呼んでいる。この広場の近くに王宮がある。町の中心は、ドイツではマルクト（市場という意味）だが、アムステルダムではダム・プレーンであり、つまり王宮——昔は市庁舎——の前の広場である。ここからローキン大通りに出て、歩き終るとミント・プレーンに出る。ミントは昔の鑄造場であり、ここにミント・タワーがある。ここからレンブラント・プレーンまで大通りを進む。ここもにぎやかだ。レンブラント・プレーンは盛り場で、レンブラントの銅像が中心に立っている。そこからウォータールー・プレーンまで出る。ここで旧市街が終っている。だから私の先生は、市の中心部だけを意味していたのだった。ここまでで30分もかかってしまった。電車に乗るべきであった。だが折角ここまで歩いて来たので、私はそのまま歩き続けよう決心した。しかしこれは失敗だった。実際の目的の下宿まで1時間かかるのであった。それに私は大きな肩掛け旅行鞆を担いでいる。

ここから新市街に入る。動物園・水族館を越え、熱帯博物館まで来て、さすがにくたびれた。大通りを東に進んだ。そして運河をいくつも越えた。目指すりネウスパーク・ヴェークは、地図で見当をつけて探すのだが、見つからない。煉瓦建ての家が立つ静かな住宅街に入った。「こんな所に住めたらいいな」と、思いながら歩いた。ガラス窓には白いレースのカーテンがかかり、家々の中も清潔で落ち着いている。「ここは高級住宅地で、下宿はないだろう」と思っていたが、そのうちの一つの通りが、私の目的地であった。

Pという家がそれで、ドアの呼鈴に紙片がはさまれていて、多分私にあてた物だろうが、オランダ語なのでよく理解できない。電気仕掛の戸を開ける方法も分からないのだ。どうやら入れたら、中から若い男性が出て来た。「ハロー・ムネイル」。これも、「ハロー」しか分からない。後に分かるのだが、ムネイルというのは、男性にたいする呼掛けで、英語のミスターにあたる。家の人かと思ったら、下宿人だった。今は彼しかない。しばし食堂で待っていると、この家の奥さんが戻って来た。20代半ばの美しい女性である。「歩いて来たのですか?」と、驚いている。私も我ながらそれには情けなくなるのだった。私は、前の件があるので、また断られやしないかと、びくびくしている。しかし彼女は、すでに私が入ることを前提にしていた。協会から電話があったし、部屋が一つ空いていたのである。

下宿が決って、やれ安心となった。部屋は3階で、このP夫人が、「これでいいですか?」と聞く。いいどころではない、私には過ぎた広い良い部屋である。ところがこれは一番悪く、あるいは小さい部屋だったことが、後で分かった。日本人の悲しさである。尤もここしか空いていなかったのだから、夫人としては他にどうしようもなかった。

ご主人は、用足しのため、夕方戻るとのことであった。下宿代は、350ギルダー（3万5千円）だ。私は、日本の月給だけで生活しなければならない。当時、大学の講師になったばかりの人間は、恐らく月給が5万円であっただろう。私もそうであった。こうなると1カ月で差額の1万5千円で生活しなければならないなどと色々思っているうちに、彼女はここの食堂の椅子を直し始めた。日本人ならば、職人を呼ぶ。ちょっと難しい仕事だったので、随分勤勉だなと感心する。

ホテルに荷物をとりにゆかねばならない。今度は都電で往復することにした。しかし都電の乗り方がまだ分からない。切符を一枚買うと、一時間以内ならどこでも乗り換え自由で行ける。ホ

テルから、20 kg の大きなトランクを持って帰ると、ご主人のP氏が戻っていた。見るからに人のよい顔をしており、また実際によい人である。非力の日本人では、急な階段を持ち上げられない。P氏は手助けしてくれて、これを軽くもち上げた。そして、「荷物はたったこれ一つだけ？」と驚いている。こうして1日で下宿が決まり、ここで滞在できることになった。

次の日は、研究所へ行った。これからずっと通うのだから、場所を知り、様子を見ておこうというわけである。電車に乗って、目指す「・・通り」についた。だが着いたのは、研究所から見て、反対の端であった。通りの番地が小さいのである。研究所の番地は大きかったが、ヨーロッパでは数字の順に並んでいると聞いているので、その通りを歩き始めた。しかし30分もかかってしまった。私は反対から歩いたので、研究所につく間に、くたびれてしまった。受付で研究所の簡単なシステムを聞いた。何時に開き、何時に終るかなどであるが、それで帰ってきた。

次の日は、銀行へ行った。なにしろ預金口座を開かなければならない。東京でアムステルダムの東京銀行の出張所を聞いていたので、そこへ行くと、事務室だけであった。ここでは口座を開いていない。オランダの銀行で口座を開くべきだと教わり、アムステルダム・ロッテルダム銀行へ行った。一番大きな銀行である。市の中心地の支店に入って、口座を開いた。この時、大変滑稽なことが起こった。口座を開く申し込み用紙に、年齢を書く欄がある。書き終って、女子行員が、「親のサインが必要だ」と言う。「私は29才だ」と言うと、彼女はもう1度私の生年月日を見かえした。私は、日本人の中でも5才若く見え、日本人はヨーロッパでは5才若く見られる。結局私は、合計で10才若く見られる。女子行員は私を19才だと思ったのである。「すみません」などと言ったが、奥の方で他の女子行員と一緒に笑っている。3日目がこうやって終わった。初めての外国生活では、仕事1つするのに1日かかってしまう。

私の下宿の主人であるP氏は、建物を2軒持っている。1つは私の住む3階建ての煉瓦作りの建物である。当時で1500万円ほどである。日本の建物の3分の1の値段である。もう1つは、同じ通りの1分も歩かない場所に、同じ様な建物を持っている。この2軒に下宿人を恐らく20人位おいて、その内10人ほどに食事を出している。私もその1人に加わったのである。我々下宿人は、毎夕一緒に食事をする。食事は、主に奥さんが作り、主人が手伝う。10人だから大変である。一定の時刻に食事が始まるから、遅れたら食べそこなう。食事の前に黙禱をする。これは夫人が取り仕切る。そして「エート・スマークレク」（おいしく食べよう）と言って、食べる。

夕食の内容は、ざっとこんなものである。まずスープが出る。オランダで主なものは、細いうどんのようなヌードルが入ったスープ、細切り鶏肉のスープ、野菜スープ、トマト・スープである。これらが毎日替わるのである。次に主皿である。主食がじゃがいもで、ゆでて皮がむいてある。これをナイフで細かく切り、シューという茶色のスープをかける。これが大変おいしい。このスープは日本で言うと、ハヤシのシチューに似ている。おかずは肉か魚である。肉は、カツレツが週二度くらいである。それからソテーで、材料は主に豚か牛であり、ソテーには鶏が出ることもある。ときどき牛のレバーが出る。これは、とても大きなものである。日本ではこんな大きな形で出ることはないので、初めは驚いていたが、食べるとおいしい。週一度くらい、肉の代わりに魚のムニエルが出る。主にカレイか、おひょうであろう。以上に加えて、野菜が出る。人参、いんげん、ほうれん草、グリンピースが主である。人参はヨーロッパでは小さく、小指ほどである。これがゆでて丸ごと出る。いんげんもゆでてある。ほうれん草は、細かく砕かれたもので、缶詰になっている。これを温めるのだが、とてもほうれん草とは思えない。ポパイで有名なほうれん草は、これである。私はこういう形を初めて見た。またゆでたグリンピースが出る。じゃが

いもと肉・魚の食事が、月曜から木曜日までこのようにして出る。金曜日は、だいたいインドネシア風食事、つまり米である。インドネシアはオランダの植民地だったから、その影響である。肉と野菜をすきやき風にしてそれを白米の上にかける。米は、イタリア米かインドネシア米かカリフォルニア米である。これらは粒が少し長いし、水分が少ないが、かなりおいしい。これは炊いてあるのではなく、煮てある。そうでなければ、インドネシア風チャーハンが出る。以上の食事が終ると、デザートである。りんご、ヨーグルト、またはクリームが出る。りんごは、すりつぶしたもので、缶詰であり、うす甘いジャムといったところである。ヨーグルトにはジャムが少しかかっている。

朝食は、食パン、バター、ジャム、チーズ、ゆで卵、コーヒーまたは紅茶が、すべてである。普通のヨーロッパ大陸にくらべて、酪農国なので、チーズが余計につく。ゆで卵以外は制限はなく、食卓に出ているので好きなだけ食べられる。

昼食には、サンドウィッチが、各人に紙袋に詰められておいてある。サンドウィッチと言っても、食パンは4切れもあり、私には全部は食べられないほどの量である。オランダ人は体が大きいから、食べられる。パンにはチーズやハムがはさんである。袋には果物が一ヶ入れてある。たいていリンゴ、時には西洋梨である。リンゴは日本のように立派ではない。西洋梨は、東京ではよく知らなかったものだが、北海道では普通である。気候がヨーロッパと北海道とでは似ているからであろうか。

土曜・日曜は、下宿が休みである。3食付き下宿といっても5日間にすぎない。しかし土曜日の朝だけは、食事が出る。だから、土曜の昼から日曜の夕までの5食が大変となる。土曜の昼は、たいてい市内のミルク・ハウスで食事をした。結局、サンドウィッチのようなものを注文し、ミルクで食べた。日曜日は、朝と昼を兼用にし、近くのおやつのお店で何かを買った。大きなミート・ボールや揚げ物、ジュースなどが売られている。問題は土曜・日曜の夕食であった。

私の経済状態は、こうである。まず余裕は150ギルダである。そのうち、仕事のために、文房具・ノート、時には本を買い、コピーをとる。コピーは1枚25セント（1セントは100分の1ギルダで、つまり1円）だ。都電の定期を買う。定期券は、月曜から1週間、6日、5日と、種々ある。それに、郵便、種々の見物、散髪、ビール、果物、清涼飲料水である。洗濯は自分の部屋でやり、クリーニング屋には出さなかった。煙草は初め吸わなかった。こういうわけで、土日の夕食代はほとんど残らない。私は、水を飲んで、バンドを強めに締めると、空腹をあまり感じないことを発見した。しかし時々付き合いでレストランに入る。近くに、オランダ人向けの中国料理店がある。都心には沢山の中華レストランがあった。1番安いものは、バミとナシ、つまり焼きうどんと焼き飯である。昼にはランチもあり、量は少ないが安い。しかしこれでも十分だ。ランチでない普通のは量がなくて食べ切れない。

アムステルダムでは海の幸が多いのだが、すべてムニエルかフライ、あるいは薫製にしてしまう。ここでは鰻がとれるが、それを薫製にして売っている。もったいないことだと思った。蒲焼きにしたら、どんなにおいしいだろうと、魚屋の前を通るたびに思った。しかし蒲焼きはない。日本は醤油の文化であるからこれがあるのである。アムステルダムでは鰻は油で炒めて食べる。レストランで鰻はメニューにあるが、初め馬鹿ばかしくて注文しなかった。しかしある時、P一家に招待された時、珍しいからと言って、彼は鰻を一切れくれた。食べてみたら大変美味しかった。

日本人が魚を焼くと、アパート中から苦情が出るそうである。臭いがたまらないらしい。もち

ろん日本人でなくてもそうであろう。これは人間が焼かれるのを想像するからだ、言う人もいる。料理は各国で事情が違う。イギリスで、ある日本人調理師が、スッポンの殺し方が残酷だという理由で、警察に捕まったことがある。

アムステルダムと小樽は、古い商都・貿易港であった点で似ているが、小樽は樺太の喪失、鯨がとれなくなった、などによって、またアムステルダムはロンドンに商業的覇権を奪われて、衰退した。アムステルダムと小樽では鯨がとれたのに、それが少なくなった点でも似ている。鯨を英語では herring, オランダ語では haring (ハーリング) と呼ぶ。同じ鯨でもアムステルダムの鯨は日本に比べて小さい。一般にヨーロッパ人は生魚を食べないが、その例外がオランダの鯨だと言われる。しかしアムステルダムの鯨も薄い酢漬けなので、正確にいうと、生魚とは言えない。この鯨は街頭で売っている。屋台をひいた鯨売りが、街角で店を開く。通行人が注文すると、鯨を出し、まな板の上で、まず頭と尾を落し、内臓と背骨をとる。これを1センチ位に切って、一尾ごと皿に載せて出す。1971年ころ1グルデン (=約100円) だった。これを楊子で刺して食べる。鯨には細い骨があるので、骨が喉にひっかからないように、おまじないとして、玉ねぎのみじん切りをまぶして、同時に食べる。このおまじないが効くかどうか分からないが、味ではなかなか合う。この小切りの鯨を食べるのは、アムステルダムっ子の心意気には合わず、彼らは尾を掴んで、上を向いて、丸ごと口の中へ入れる。だが女性たちはこのやり方はしない。

ある国で一年以上いるなら、その国の言葉を覚えた方がよい。私はオランダ語を学ぶことにした。日本で留学のために、リングフォンの英語、ドイツ語、オランダ語を買って、この3カ国語をマスターしておこうとしていた。英語は終わったが、ドイツ語とオランダ語はほとんど手についていなかった。ちなみにオランダ語というのは日本の表現である。ネーダロンドと聞こえる。オランダは、正しくはネーダーランドである。もっとも有名な州がホラント州であるので、ネーダーランドのことを日本は長い間オランダと言ってきた。その上、ホラント州と言っても北ホラント州と南ホラント州とがあり、ホラント州というものの自体は今はない。さて、アムステルダムでオランダ語を教える学校があることを知り、そこを訪れた。授業料は、月500ギルダで、毎日午前中たっぷり教わる。下宿人のスーシー氏に話すと「安いよ」と言う。私も、もちろん安いと思うが、150ギルダしかない余裕の中でそれだけとられるとつらいので、弱った。すると、同じ下宿のブリンクマン氏が「私が教えてあげようか」と言う。ずいぶん親切な人だなと思い、「それは有難い。お願いします」と言った。早速、週3回1時間づつ教えてもらうことになった。するとブリンクマン氏は「1時間5ギルダで」と言った。いや、恐れ入った。しかしもう後にひけないので了承した。こうしてブリンクマン氏の部屋へ、週3度、夜、通うことになった。レッスンは、実際は1時間であるが、長引いて、いつも2時間かかった。もちろん彼は1日5ギルダしかとらなかった。ブリンクマン氏は、61、2才で、元銀行員であった。髪はかなりうすくなっていて、白かった。大変穏和な人物である。離婚していて、一人暮らしであった。離婚の原因は分からない。私は、彼との長い付き合いのうちでそれを一度も聞いたことがない。ただ、「もう奥さんの所へ戻る機会はないのですか？」と一度聞いたことがある。「全然ありません」と彼は答えた。奥さんは娘を養育している。その人はクレーテという娘さんで、彼女は父と時々会うのだ。

これまた同じ下宿のオーバハ氏は、初老の会社員でシュリナム人である。シュリナムというのは、南アメリカの北の小島らしい。日本では聞いたことがなかった地名である。オランダの旧植民地だったので、この民族はアムステルダムによく住んでいる。1度シュリナムの記念切手もオランダで出たことがある。彼に困ったのはチェスである。オランダ語ではスカークと言う。彼は

チェスが私より少し弱い。しかしなぜか私より強いと思い込んでいる。そして「待った」をしてばかりいる。「待った」をされれば、私と彼とは強さが同じ位になる、あるいは彼の方が強くなるだろう。そういうわけだから、私はオーバハ氏に、待ったは絶対止めようと提案した。チェスでは駒に触ったらその駒を動かさねばならない。まして動かした駒をもう1度戻したり、違った場所に動かしてはならないのである。だがオーバハ氏は平気でやる。もちろん「すみません」くらいのことは言う。しかし約束したにもかかわらず、彼は待ったをする。「君とはもうやらない」と、何度喧嘩腰になったか分からない。私は、民族差別感情を余りもっていないと思っているが、彼に関しては、少し違う。この民族は約束を守れないのではないかと疑ってしまう。

チェスの恩人は、スーシー氏である。彼は私よりも、強かったが、そのうち同じくらいになった。ある時、「チェスは理論的に基礎から研究しておかなければならない」と彼が言ったのである。そこで私は、英語のチェスの本を買った。理論書と実践譜の書である。どちらかはオランダ語かドイツ語だったかも知れない。理論書を読んでいたら夜が更け、明るくなった。そのため研究所は1日休んでしまった。だがおかげでチェスは強くなった。

スーシー氏は略称であり、本当はスラシラワニという。かなりの人格者である。60才くらいのインドネシア人であった。インドネシアもオランダの旧植民地だった。だからオランダには多くのインドネシア人がいる。皮膚の色は真っ黒であるが、同じアジア人なので親近感がある。彼もブリンクマン氏と同様、インドネシア人の細君と離婚して、彼女が子供を育てている。彼は、インドネシアのみやげ店をアムステルダムで出しているそうだが、私は、ついぞ行ったことがない。彼の発言から推測すると、余り大きな店ではないようだし、大変儲けているとも思えない。その証拠にこのような下宿にいるからである。

スーシー氏はその後、オランダ女性と結婚した。彼女はベルギーに住んでいる。この新しい女性は、私たちはタンヤおばさんと言っているが、ブリュッセルでインドネシアみやげ物店を出している。もしかしたら正式に結婚したのではないかも知れない。彼女はわが下宿に何回か遊びに来る。スーシー氏は、だからと言って、下宿を出るわけではない。ときどきわが下宿に帰って来ないときがある。ブリュッセルに行っているのかも知れない。タンヤおばさんは、かなり立派な顔立ちで、なかなかの美人である。友人ブリンクマン氏は、それが理由かどうかは分からないが、うらやましがった。スーシー氏のアムステルダムの店には遊びに行かなかったが、彼女の店（ブリュッセル）には遊びに行った。タンヤおばさんは、一度、オランダ人と結婚した。娘が1人生まれて、その後離婚した。なぜスーシー氏と再婚したのか分からないが、インドネシア・ファンズのオランダ女性というのがいるらしいし、それが理由なのかもしれない。娘は、美しいオランダ少女である。ブリュッセルには、スーシー氏の娘が2人遊びに来ていたが、タンヤおばさんの娘と比較しても、見劣りがした。私の民族的偏見ではないと、思う。

ブリュッセル行きの旅行に一緒に行ったのは、クレメント氏で、高等学校の理科の先生である。大学出であり、この下宿で1番の紳士である。彼も離婚している。スーシー氏、クレメント氏、私の3人で、クレメント氏の自動車で行った。スーシー氏がなぜ私を誘ったのかは分からないが、私が気に入られたのかもしれない。クレメント氏を誘ったのは、多分気に入っていることと自動車を持っていることであろう。ガソリン代は我々3人で割り勘にした。有名なグッチ・カウントである。行きの途中、ガソリンが切れたので、1度ガソリン・スタンドへ寄った。アムステルダム・ブリュッセルの往復で、たしかその1回だけだった。その時、クレメント氏が「ここでベンジーンを入れよう」と言ったので、私は、自動車にはベンジーンが必要なのかと驚いた。だがガ

ソリンのことだったのである。帰りに、各国の歌を歌おうと言うことになり、私は、日本の歌を一つ歌うことになった。原語で歌おうと言う。日本らしい歌は何だろうと考えたすえ、私は、「春高樓の花の宴……」を歌った。それを聞いていたクレメント氏は、「ずいぶんモノトーンの歌ですね」と言った。そう、よく考えると日本の歌はモノトーンだと、改めて知った。

下宿で2番目に親しくなったのは、ブーハー君である。彼はスイス人で、印刷工である。スイスのベルン近郊で老父が農業をしている。アムステルダムは昔から本の町で、印刷工が多い。ベルンより仕事があるそうで、彼は中学を出て数年後、アムステルダムへやって来た。私より一年早く下宿にいる。故郷スイスに恋人がいて、ある時、ブーハー君は彼女をアムステルダムのわが下宿に呼び寄せた。素朴な感じのいい子だった。おとなしくてちょっとはにかみや風にも見えた。私は、二、三ことお喋りをした。彼女はドイツ語を話した。2人は婚約をしていた。しかしブーハー君はその後、アムステルダムのオランダ女性を恋人にしまい、彼女をふってしまった。そのアムステルダム女性は下宿にも遊びにきた。彼女は、活発で、おきゃんであった。なにしろハキハキしているし、強い。ブーハー君がその女性と結婚し、新婚旅行に行くので、新郎新婦を、アムステルダム駅まで見送りに行った。

ブーハー君は結婚して下宿を出て行った。ここは男性だけの下宿であって、このように男性は結婚すると、ここを出て行く。そして新しく男性下宿人が入って来る。私はこうして10人以上の普通のヨーロッパ人とつき合った。

ブーハー君が下宿にいる時は、1番よく彼と遊んだ。先ず言語遊びである。アルファベットが書いてある小さなチップを、縦横に並べて、単語を作る遊びである。先手、後手を決め、1つつ置く。相手が置いたチップを利用してよい。私は、英語、ドイツ語、オランダ語、彼はドイツ語、オランダ語と制限をしておいて、知っているかぎりの言葉を作り、できた数で勝負を争う。だがブーハー君には私はいつも負けてしまった。次に、彼は、小型のルーレットを持っているので、これで遊んだ。休みの前日に夕方から真夜中までやったのは、トランプの「21」である。これはごく小額だが賭けた。四、五人でやるものだが、皆、夢中になった。ダイス=さいころを3つつ使って666を作る遊びもした。これは本当に興奮する。

ブーハー君らと私と3人で、レンブラント・プレーンへ、一度遊びに行った。そこはアムステルダムの盛り場である。先ず、ビール1杯付きのショーを見た。主に、手品である。南ヨーロッパから出稼ぎに来た手品師が、非常にうまい業を見せる。ヨーロッパでは手品ショーがさかんである。いい加減堪能してから、店を出て、隣を見るとバーがある。女性がハーフ・ヌードになった写真も飾ってある。ショーをするらしい。値段も安そうだし、3人とも入ったことがないので、入ろうということになった。ビールを飲みながら、バーの女性たちと、お喋りをする。彼女たちはそのうち、ショーを見せると言う。ストリップではないが、セクシーな踊りをする。女性たちは、オランダ人2人とスペイン人であった。彼女たちは英語を喋るが、私はオランダ女性とオランダ語で喋った。彼女は、「オランダ語を喋る日本人に、初めて会った」と言って、私に驚いている。彼女たちは、シャンペンをついでよいかと、我々に聞いた。これは、店にとっては重要問題なのだった。ビールは安い、シャンペンは高いからである。我々は、「アストゥブリーフト」(どうぞ)と言ったが、最後の勘定で驚いた。請求金額が、我々3人の持っているポケット・マネーでは足りなくなってしまうのである。(未定)